



美浜 3号事故 3年を振り返って思う

森を楽しく、村生き活き」にしたい

美浜町 松下 照幸

関西電力美浜 3号機事故からほぼ3年が経過しました。交通事故以下レベルの検察判断を受け、何事もなかったかのごとく、3号機は今、調整運転を開始しています。事故3年目の8月9日頃の営業運転再開をめざして…。11人もの死傷者を出した悲惨な事故でありながら、責任の所在を明らかにすることなく被害者家族の不满を引きずったままの運転再開であります。

関西電力は「事故の責任は会社にある」と強弁しながら、会社トップの実質的責任を問うことはありませんでした。こんな事がなぜ許されるのでしょうか。ある下請け会社の方が「5人くらいは厳しい処分を受けると思ってたが、何にもなかったな」と言われました。原子力発電所で働く内部の人達でさえ、検察や関西電力の判断を不審に思っています。その方は、「被害者家族がもっとがんばらなきゃなあ」と付け加えました。一時、検察の判断を不服とする被害者の動きが報道されましたが、その後はどうなったのでしょうか。私には、関西電力は被害者の方達への口封じも行ったのではないかとさえ思われます。

事故再発防止策がまとめられ、いかにも効果的であるかのごとく記述されていますが、事故の具体的責任を問わずして、何の実効性があるのでしょうか。「まやかし」とはこのことです。事故の「責任逃れ」のために、「事故再発防止策」で多言を労するという他にありません。

美浜 3号機事故は、配管の減肉という老朽化の典型的な事故であり、老朽化した設備の品質管理がないというまさに原子力発電所の「運転資格が問われる事故」でした。規制緩和」という大きな流れの中で、電力小売り自由化が進行し始め、コスト削減が電力会社に強いプレッシャーを与えていました。電力会社は、発電所で老朽化が進行しているというのに、安全を犠牲にして定期検査の短縮を強行し始めたのです。下請け企業の方の悲鳴が、直接、私の耳に伝えられました。内部告発です。二名の方から二件の告発を受け、私は、美浜発電所の技術系次長に二度にわたって警告を行いました。「こんな事をやっていたら、必ず大きな事故を起こすことになる」と強い口調で伝えた

のです。内部告発を受けて、私は美浜町議会でも一般質問を行っています。彼らは何の対策もとることはありませんでした。会社トップの号令のもと、一丸となって定期検査の短縮に取り組んでいたからです。そういう点で、この事故はまさに人為的な結果であり、必然であったとも言えるでしょう。それ故に、事故の責任の所在を明確に出来ないということは、どんな策を提案しても事故の再発防止につながらないと言えるでしょう。

そのうえ、老朽化が原子力発電所という巨大システムで進行していること、その巨大技術を運営する多重構造の「人の管理」の難しさ、被曝労働という特殊な労働形態、老朽化を診断する技術の危うさ、耐震安全性の信頼性欠如、定期検査間隔の延長、電力自由化体制でのコスト圧力、等々。どれ一つをとっても、解決不可能なものばかりであり、私達の不安を消すことはできません。

6年前の美浜原発増設要請に対して、その3年後、関西電力は「要請に応じることは出来ない」と旨の回答を美浜町に伝えました。関西電力は「美浜町の要請だけに答えられない」と述べたのではないことは明らかです。関西電力は「もう原発を作りません」と答えたに等しいのです。国の強硬な原子力推進政策に乗って甘い汁を吸い続けてきた電力事業者が、原子力推進の大前提であった「地域独占」、総括原価方式」を崩すという国の電力自由化政策に危機感を持ったのでしょうか。美浜 3号機事故はその危機感に追い打ちをかけるかの様相でした。私達には、ようやく原子力発電のソフトランディングが見え始めたかに感じられました。

ところが、ここに来て、国は、エネルギー問題、地球環境問題を持ち出して、原子力推進政策を強硬にすすめたしました。既設原発の更新時期の問題がありヨーロッパでも軸が揺れ始めた観があります。あと一息までせまった日本の「一般家庭の電力自由化」は、今年の「特組み議論開始」予定を延期するという策で固まりました。電力事業者への原子力推進支援体制です。国の硬直したエネルギー政策が、公正な議論の場を設けることなく、一方的に宣伝をされています。美浜 3号機事故で、定期検査の悪質な手抜きが発覚したと

いうのに、定期検査間隔の延長、維持基準の導入など、国の政策はいっこうに改まろうとはしていません。国の原子力発電所の「安全規制」(?)に、私は強い危機感を持っています。

美浜3号機事故は、地域の身近な被害者を多数出したという点で、地域住民に非常な緊迫感を与えました。事故の直接的被害者以外でも、発電所の仕事に関わっていた作業員は、我が事のように事故を受け止めました。発電所の品質管理のお粗末さが報道され、定期検査短縮による下請け企業の苦しみも広く伝わりました。当然のこととして、私自身の評価が上がることになりました。まるで「汚いものを見る」ように私を見ていた目が、大きく変わり始めたのです。市民運動として美浜町で一人七転八倒してきた私自身から、肩の力が抜け、正面から原子力発電の是非について町民と語り合えるようになりました。美浜町内で「原子力発電に未来がある」などと本気で考えている人は、極少数派であると私は思っています。多くの人は「原子力発電所に替わるものを見つけれない」でいるだけなのです。

原子力発電所が運転を開始してから数年を経過した頃です。村の同級生、近所の同年代の人たちが、原子力発電所に勤めながら、自分自身や生まれてくる子供達の健康に不安を抱いていることを耳にしました。

地域に優れた地場産業さえあったら、この地に原発は来なかった...」。原子力発電に替わる良い職場があれば、誰が原子力なんかに行くものか」というのが、私の率直な思いでした。良い地場産業さえあったら...」という思いが、いつも私の頭にこびりついていました。

家が貧しくて、私は普通の大学へ行くことができませんでした。高校2年の一学期を終えた時、身体障害者だった親父から引導を渡され、私は泣いて家を飛び出しました。月明かりだけの真っ暗な森の中を、泣きながら裸足同然で歩き回りました。何時間か歩いて、「お袋が心配しているだろう」と思い、家に帰りました。親類を集めて私を探しに行こうとしていたようです。私の枕元にお袋が来てくれました。私らに甲斐性がないために、おまえを大学にやることは出来ん。堪忍しておくれ」と、布団をかぶって泣いている私に向かって正座をして、手をついて、泣いて謝ってくれました。私は了解しました。経済的な理由で進学できないことは分かって



森と暮らすどんぐり倶楽部の喫茶店

いたつもりですが、辛かったのです。お袋の誠実さにも打たれました。その時に私は、分かった。お袋と親父の面倒は最後まで見てやる」と決意しました。紆余曲折はありましたが、その決意が実現できたことは私の小さな誇りとなっています。

当時の電電公社大学制度を卒業した私は、転勤も昇進も頑として断り続けました。学校で学んだことを生かしたいという思いもありましたが、お袋への約束があり、会社のルールに乗ることはできませんでした。職業病に悩む女性達と出会ったことも、大きな要因でした。両親が年老いたため、福井市勤務を実家から通勤できる敦賀市勤務へ替える要望を会社に提出しました。会社は応じてくれませんでした。私は一人で会社と渡り合い、「自力」で転勤を勝ち取りました。一方その結果として、私は長い間、会社に居づらい思いをしてきました。40歳を過ぎる頃になると、幼い頃に遊んだ森の風景が頭をよぎるようになりました。「娘達の学費のめどが付いたら、会社を辞めて、自分の好きな人生を歩みたい」と思うようになったのです。森と暮らすどんぐり倶楽部の構想の始まりです。幾人かの人から「松下さんも大変な人やと思うけど、奥さんがすごいと思う」と言われました。ある飲み会の場で同様のことを言われ、「ほんまやなあ。うちの嫁は、ほんまに変わつとるんや」と返して、大爆笑となったことがありました。我が家の嫁抜きに今の私はありません。どんぐり倶楽部の「吉永小百合」と持ち上げて、いつも機嫌をとっています。

どんぐり倶楽部も、今年で6年目に入りました。最初に作った五ヶ年計画をほぼ想定内で終わることができ、今、新五ヶ年計画を策定して事業を進めています。基礎作りから、事業の質をアップする転換点になり



小さな小さな風力発電



森の学校」で森の楽しさを語る



可憐に咲くサラサドウダンツツジの花

ます。まだまだ厳しい実情ではありますが、少しずつ期待が持てる状況までたどり着くことが出来たかなと思っています。

原子力発電を批判する仲間の石地さんが途中からどんぐり倶楽部に加わってくれました。素晴らしい仲間です。石地さん抜きにも、今のどんぐり倶楽部はありません。黙々と、自分の持ち場を理解して作業を行ってくれます。体力的に粘りもあり、一緒に作業をしている

と、私がサボっているように感じるときもあるほどです。余談ですが、石地さんによれば、山村に生まれ育った私は「狩猟民族」であり、石地さん自身は「農耕民族」なので「粘り」を身上」とするのだそうです。なるほど、そうかも知れませんね。

私達は、地域で森の事業を経営的に自立させ、優秀な若い人たちを一次産業へ誘い込みたいと本気で考えています。今はまだ「ホラを吹いている」段階ですが、私達は決してあきらめません。私達自身が森の事業をととても楽しんでいるのです。「そんなに楽しいところに人が集まらない筈がない！」じゃありませんか。今年の夏は、沢山のお客様の予約が入っています。林業体験に来て頂くお客様も増えています。今年の春には、小さな小さな風力発電も開始しました。日本でたった一つの、私立の、紅ドウダンツツジ公園」もオープンさせました。石地さんがその公園長です。9月の若狭ネットの集会では、紅ドウダンツツジの花の素晴らしさをプロジェクターでお見せしたいと企画しています。歓声が上がること間違いありません！」...と思っています。

話はなかなか尽きません。森と暮らすどんぐり倶楽部誕生前夜から現在に至るまでの要旨を書きつづてきました。いろんな意見を言われることもありますが、私達は、地道に、私達のやり方にこだわりながら、森を楽しく、村生き活き」にしたいと願っています。そしてこのことこそが、地域での私達の原子力批判に信頼をいただけるのだと確信しています。地域に根を張り、その根の深さで、できるだけ多くの人たちとつながり会うこと。私達は愚直に、この理想を追い求めたいと考えています。

(2007年 7月 10日記)

< 追伸 >

読者の方で、観光事業者の知人、森林を利用した環境活動に関心のある企業担当者の知り合いがあられましたら、是非ご紹介頂けないでしょうか。こちらからお伺いしまして、お話しをさせて頂きたいと思っています。

インターネットをご利用の方は「森と暮らすどんぐり倶楽部」の下記ホームページもみて下さい。

<http://green.ap.teacup.com/donguri-club/>

「森の国から」の機関誌も6月 25日にNo.2を出すことができました。皆様のご支援に厚く感謝しています。

「森の国から」のバックナンバーはホームページに掲載していますのでご覧下さい。ブログもみて下さいね。